大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

近世前期狂歌の中の歌謡：『古今夷曲集』『後撰夷曲集』『銀葉夷歌集』の手法について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-04-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒木, 祥子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004695

近世前期狂歌の中の歌謡

――『古今夷曲集』『後撰夷曲集』『銀葉夷歌集』の手法について――

黒木祥子

「四角柱や角らしや　角のないこそ添ひよけれ」と、狂言や阿国歌舞伎歌に見られる歌謡で始る『古今夷曲集』序の中には、幾つもの歌謡の詞章が織り込まれている。これは先行の『吾吟我集』序が、古今集序を歌謡の文句で置き換えるのに倣ったのかもしれない。しかし、『吾吟我集』序が古今集序のもじりに終始したのと異り、『古今夷曲集』序は狂文ながらも一編の狂歌論になっており、一応の狂歌史と本質論を有している。それは、「世を諷し人を謗」る落書を否定し、「笑ふなかだち」「咄と笑ふに罪を失へば、自ら情の丸うなるべきよすが」とするありふれたものではある。その笑いは、「八島の外までの家々の諺」「唐の大和の異様なる詞」あるいは子供をあやす詞などの戯言を連ねることに依りもたらされる。詠まれる内容より言葉を重視した説であり、貞門俳諧の俳言の説に通うところがある。そういった戯言の中に歌謡の詞章が含まれることは、序文中に多く取入れられていることから認められるだろう。

『古今夷曲集』の撰者生白堂行風は、続いて『後撰夷曲集』『銀葉夷歌集』を編んでいる。この三集の狂歌について、歌謡を利用する手法の面から考察してみたい。

一

『古今夷曲集』以下三集には、右肩に典拠の種類を表す注記を持つ狂歌がある。たとえば『古今夷曲集』の巻頭歌は

古年に春たちける日よめる　　源重秀朝臣

本歌アリ
年の内の春の小袖は一しほの　浅黄とやせん濃染めとやせん(1)

であるが、これは『古今和歌集』巻頭歌

年の内に春は来にけり一年を　去年とやいはん今年とやいはん

のもじりである。右肩の注記（以下肩書と称する）は、この狂歌が

古今集の和歌を本歌としていることを示すものである。和歌のもじりは古くからの狂歌の手法であるが、それを本歌取とみなすのである。『後撰夷曲集』付録『夷歌式』は歌学書に倣って（パロディの意識はない）狂歌の式目を定めたもので、本歌取の仕方についても二条にわたって述べている。しかし、肩書には表Ⅰに示すとおり様

〔表Ⅰ〕

古今夷曲集		後撰夷曲集		銀葉夷歌集	
本歌	一二九	本歌	一四三	本歌	六六
本詩	一	本詩	八	本詩	四
本語	六	本語	一一	本語	八
		草紙詞	八	本説	一
		世話	一〇八	世話	一一
謡本語	二	謡詞	二二	諷詞	五
		式三番詞	二	式三番詞	一
		三番叟詞	二		
		狂言詞	二		
		小舞詞	一		
		小歌詞	六	小歌詞	二
		踊歌詞	四		
		木遣詞	一		
		獅子踊詞	一		
		舞詞	一		
		浄瑠璃詞	一	童諺	一
		童口遊詞	八		
		童愛詞	二		

々なものがあるにもかかわらず、本歌以外の典拠のとり方については何も述べてはいない。

『古今夷曲集』の肩書は、「本歌」[2]が圧倒的に多く、全歌数の一割強を占める。その他に、漢詩に依る「本詩」、『伊勢物語』や『徒然草』・経典・故事や諺的な文句まで含めた「本語」、謡曲の詞章に依る「謡本語」が少数ずつ存在する。本説・本文・詩・物語の詞を取ることは和歌に先例があり「謡本語」のみが新しいものである。ところが俳諧では万治から寛文にかけて、謡曲調と呼ばれる流行が見られる。[3] 特に松江重頼撰『佐夜中山集』（寛文四年刊）では、発句を典拠のない「只」の句の巻、「本歌取」巻、「諷之詞」に依る句の巻に分け、和歌と謡曲とを同等にすえている。謡曲調の流行には大阪特に堺の俳諧師が関っているとされ、『古今夷曲集』以下三集の中心を占る作者群と重なりあう。撰者行風も『佐夜中山集』「諷之詞」巻に、三句入集している。彼が「謡本語」を典拠として承認した背景には、俳諧の謡曲調流行があるだろう。しかし『古今夷曲集』では、和歌以外の典拠についての関心は未だ低い。

『後撰夷曲集』では肩書の種類が急激にふえ、関心の高まりが感じられる。前集の「本語」から巷間の諺が「世話」へ、日本の古典散文に依るものが「草紙詞」へ出、「本語」には主に漢籍に依る故事金言が残る。但し、『伊勢物語』や『徒然草』の詞が少数混り未整理である。[4]「狂言詞」と「小舞詞」、「小歌詞」と「踊歌詞」、「式三番

詞」と「三番叟詞」の違いも、それぞれ前者が後者を含めたもののようだが分明でない。全体に未整理の感がある。『銀葉夷歌集』では、本歌取的手法に対する興味が失せたようで、肩書の付け落しが多い。

以上のように、三集の間で肩書に対する関心のあり方にやや違いがみられる。そこで、歌謡に関してのみ修正したのが表Ⅱである。「謡詞」は、和歌と重なるもの、筋や登場人物名・曲名のみ出るものは除いた。[5]「狂言詞」は、「小舞詞」と「小歌詞」に分け、「踊歌詞」は「小歌詞」へ入れた。

〔表　II〕

	古今	後撰	銀葉
謡詞	七	二八	九
翁三番叟	一	四	二
小舞詞	一	二	一
小歌詞	二	一三	一二
獅子踊詞		一	
大黒舞詞			二
万才詞		一	一
木遣詞		二	
囃詞	一	三	四
舞詞		一	
狂言台詞	一		二
浄瑠璃詞		一	二
童謡	二	一二	五
計	一五	六八	四〇
全歌数	一〇六一	一六九四	一一八六
%	一・四	四・〇	三・四

このようにして、典拠がありながら肩書のない狂歌を補っても、全歌数に占める割合は非常に少く、俳諧での流行には比すべくもない。その中で、『後撰夷曲集』で急激にふえた「謡詞」の狂歌が、『銀葉夷歌集』では激減して『古今夷曲集』の水準に戻るのに、「小舞」以下の俗謡[6]に依る狂歌はふえたままである。準古典とされる謡曲と戯言そのものである俗謡とでは、利用の仕方に違いがあるように思われる。

次に個々の狂歌について検討してみたい。

二

(1)　春雨の風に従ふ海道の　しるくなれども早乾きけり
(古46雄長老)[7]

○実にや春雨の風に従ふ海棠の眠れる花の如く也[8]　(皇帝)

水でとく膠(にかわ)のあやめ杜若　にたりや似たりとにためきにけり
(古85雄長老)

○色はいづれ。似たりや似たり杜若花あやめ　(杜若)

二首とも『雄長老狂歌百首』からの転載。天正十七年成立とされる

古い狂歌集で、禁忌にとらわれない大胆な諧謔味の強い狂歌が多い。肩書はないが、二首とも謡曲の文句に依る。前者は、病中の楊貴妃の美しさの比喩である海棠を海道と、あらぬ意味に取成して、春雨にぬかるむと展開させるもの。後者は、菖蒲と杜若が似ているの意味をニタリとべたつくと取成し、参河を膠ともじって一首を続けたもの。当代の作者にも次のような例がある。

腹中は赤地の錦ひたたれに　下し給ふは瓜の実盛

（古748ト養）

○実盛都を出でし時宗盛公に申すやう、故郷へは錦を着て帰るといへる本文あり（中略）御免あれと望みしかば、赤地の錦の直垂を下し賜はりぬ　（実盛）

鬼食も只おのづから胴に入て　膳を見れども進まざりけり

（後1281是急）

○本来(もとより)来る所もなければ出家といふべき謂もなし。出家にあらねば髪をも剃らず衣(ころも)を墨に染めもせで、唯おのづから道に入って善を見ても進まず智を捨ても愚ならず　（東岸居士）

二首とも肩書がある。ト養の狂歌は、瓜の過食で赤腹を病み瓜の種を下したと取成すもので、奇抜なようだが、全く同発想の狂歌がある。

我腹は赤地の錦のひたたれに　下らせ給ふ瓜の実盛

（長崎一見狂歌集109）

このような、特によく知られた謡の文句の意味の取違いや取成しは笑話の類型にもなっており、『醒睡笑』謡の項はこの類のものが多い。古くからの手法だが、あまり滑稽をねらうものは次第に排除されていくようである。ト養は幕府御番医で、立場上即興歌が多く、地口や洒落が中心の滑稽味の強い作風である。是急は長門、一見は肥後の俳人。三人とも行風からは遠く、やや古風な作者のように思われる。

翁草花咲く比は露払ひ　絶えずとふたり常に訪ふたり

（古225入安）

『入安狂歌百首』からの転載。入安については堺の人かという以外不明だが、『雄長老狂歌百首』と同じく也足軒の点があるのでやはり古い狂歌集である。下句が翁の文句そのままで、滝の音の喩えを訪ふと取成すもの。翁・露払と翁猿楽の役名を詠み込む。同音異義の取成しは同じであるが、諧謔味は無く、細かい技巧が目立つ。これは翁三番叟の詞章を取る狂歌一般の傾向である。

(2)　謡なす千手の御手のそれならで　さま座摩の神の誓ひ雨山

（後636行風）

○深き誓ひも数々に、千手の御手のとりどり様々の誓ひ普(あまね)くて　（田村）

祝はうよ猶も庭には金銀の　砂をしきの初成もの（銀12行風）

○雲龍閣や阿房殿、光も満ち〳〵てげにも妙なる有様の、庭には
　金銀の砂を敷き、四方の門辺の玉の戸を　（邯鄲）
食ふてみねば味は知らねど類ひなき　名をもち月の真丸ななり
（後433満永）
○類なき名を望月の今宵とて　（三井寺）
○さなきだに秋待ちかねて類なき　名を望月の見しだにも
（姨捨）
一文に三把さうなる鈴菜こそ　何よりもつて安ふ候へ
（後94満永）
○それがし元の座へ直らうずることは、尉殿の舞より以て易う
　候、まづ御舞ひ候へ　（三番叟（面箱持或は千歳の応答））

行風の初めの狂歌は雨乞の神の座摩明神の名を謡の文句と掛詞にしたもの。次は「敷き」と「四季」の掛詞。満永の狂歌は、前者は「望」と「餅」の掛詞、後者は(1)の入安の狂歌と同じく同音異義の利用で「易」を安価に取成すもの。三番叟を「三把」、鈴を「鈴菜」など細かい技巧を使う点も同じ。

四首とも肩書がある。斉藤満永は三集共に入集し、特に『後撰夷曲集』では百四十四首と最多入首者である。撰者行風と共に代表的な作風を示すものかもしれない。行風よりなめらかでわかりやすいが、平板とも言える。

水の干て嬉しきかなやいざさらば　越さんと望む人大井川
（後711友信）
葛城の山伏達の行道に　馴れて壺井の里人や是　（銀1105貞室）

前者に肩書。「嬉しきかなやいざさらば」は「老松」「呉服」の文句に依る。大井川に面した金谷宿を掛ける。後者「馴れてつぼいは山伏」という「大江山」の文句に地名の壺井をかける全く同じ手法である。掛詞は、『後撰夷曲集』『銀葉夷歌集』の最も一般的な手法である。

(3)　睦月ながら味気しきなく捨てられし　子はそも何のむく犬の年
（古469夏虫）
○子をば忘れぬ親なるに　失はれ参らせし子はそも何の報ぞ
（藤戸）

戊の年に捨子を見ての詠で、「むく犬の年」の秀句が眼目であるが、元の謡の報いの意味が残っている。

謡初る声も長閑にたつ春の　時の調子を酉の年哉　（後48顕輿）
○其時静は立上り、時の調子を取りあへず　（船弁慶）

「山姥」にも類似の句がある。これも「取」意味が残るが、元の意味が全くなくなり単なるかすり、地口になっている狂歌は多い。

なふ上手都に近き宇治の人　聞きしにまさる目医者なりけり
（後1398友信）
○げにや名にしおふ、都に近き宇治の里、聞きしにまさる名所か

な〳〵　（頼政）

三番三おふ西翁の点あらば　喜びあらん我が俳諧　（銀896正信）

おさへあうて悦びあへる乱酒には　ざれて肴にふむ三番三　（銀947長屋）

○おおさえおおさえ、喜びありや喜びありや　（三番叟）

後二首は三番叟の揉みの段の唱え言に依るが、卜養の狂歌にも「うさいわう」と記すものが二首あり、そのように聞きとっていたようだ。前者は、西翁西山宗因に俳諧の点を依頼した挨拶吟。後者は盃をすすめ合う酒盛の様子。

(4)　相番の宿を並べて門の前　井筒に夜の火用心はよき　（古533保友）

水祝ひ肩を並べて門の前　井筒によるは丸裸なり　（後61太極）

○昔此国に住む人の有りけるが　宿を並べて門の前井筒に寄りてうなる子の　友達かたらひて　（井筒）

二首とも「井筒」の同じ詞章に依っている。「寄る」と「夜」の掛詞はあるがそれよりも、町の自身番が寒空に寄合う様子や、水をかけられた新婚夫婦の姿の表現に、可憐な少年少女が遊ぶという「井筒」の詞章を取合せる滑稽が眼目である。元の謡と全く関係のない場面と取合せる技法は、(1)の同音異義の手法と対抗するものである。

山崎や嬋妍たりし両鬢を　油に浸す八幡の神子（9）　（古296久清）

○頭には霜蓬を戴き、嬋妍たりし両鬢も膚にかしげて墨乱れ　（卒都婆小町）

短尺をつけられたるは不思議やと　見れば旅宿の風鈴なりけり　（後750成之）

○箙を見れば不思議やな短冊を付けられたり、見れば旅宿の題をする　（忠度）

大和にも織る唐綿のいとなみは　今敷島の木綿ふとんよ　（後574忠直）

○大和にも織る唐衣のいとなみを〳〵、今敷島の道かけて、言の葉草の花までもあらはし衣の色をへて　（呉服）

しんの姿枝葉のながし水きはや　見所多き床のたて花　（後1023行重）

○げにや遠国にて聞き及びにし宇治の里、山の姿川のながれ遠の里橋の景色、見所多き名所かな　（頼政）

竹橋も渡りかねたる世の中に　住むばかりなる灸するが宿　（銀1013伯水）

○いさ白波の宇治の川に舟と橋とは有りながら　渡りかねたる世の中に住むばかりなる名所旧跡何とか答へ申べき　（頼政）

ほとんどは俗に転換するが、

郭公終に名のらぬ老武者も　坂東声はありとこそきけ

○名のれ〳〵と責むれども終に名のらず、声は坂東声にて候ふ　（後241宣就）
（実盛）

は、待郭公という和歌の心を、謡曲「実盛」と組み合せるものである。

また、転換の面白味より、縁のある物と結びつけるものもある。

買得たる市の宝と諷ひしは　むべ住吉の松原で候　（銀339正信）

○いつまで草のいつまでも変らぬ友こそは買ひ得たる市の宝なれ　（松虫）

「松虫」は住吉に縁のある謡曲で、市の宝は住吉の宝の市の神事である。名所にちなんだ謡の文句を引いてきたまでである。

(5)　不思議やな風にまたたく灯の　消えぬと思へば蛍にて候　（後278貞富）

○風にまたたく灯（ともしび）の消ゆると思ふ心地して、あたりを見ればうば玉の、闇の現（うつつ）の人もなく　（夕顔）

馳け出や山々峰入里々を　めぐり〳〵て今朝（けさ）の斎科　（後1554貞富）

○山々峰々里々をめぐり〳〵てあの僧に逢ひ奉る嬉しさよ　（花月）

ひつくはへよつひきひようと射ばやとは　思ひしかども逃てどちやら　（後408貞富）

○花の木蔭に狙ひ寄って、よつぴきひやうと射ばやと思へども、仏の戒め給ふ殺生戒をば破るまじ　（花月）

川波にばつと放せば面白や　鵜は〳〵たかる魚を取りけり　（後326貞富）

○島つ巣おろし荒鵜ども、此河波にばつと放せば、面白の有様や、底にも見ゆる篝火（かがりび）に、驚く魚を追ひまはし　（鵜飼）

手法は(4)の取合せの手法である。貞富は大阪の俳人で、『後撰曲夷集』には満永についで百七首入集している。狂歌史の上では、一門の貞因、言因（鯛屋貞柳）と共に重要な人物である。作風は闊達で、掛詞やもじりなどの細かい技巧よりも、俗語の使用や俗情を詠むことに特色がある。典拠のある狂歌は、そのこと自体を趣向としているので、卜養のような例外もあるが、あまり卑俗なものはない。その中では貞富の狂歌はやや俗である。二首目は、親子の再会の喜びを山伏がやっと斎にありついた喜びに変え、三四首は「どちやら」「うはうはたかる」といった俗語と結びつけるもの。

(6)　世にうたふ殺生石のそれならで約束固き君と我中　（後776一圃）

○今逢ひがたき御法を受けて、此後悪事をいたす事あるべからずと御僧に、約束固き石となって〳〵、鬼神の姿は失せにけり

（殺生石）

これや是彼頼政がぬぎ捨し　扇の芝の鎧草かも　（後301円乗）

○是までと思ひて、平等院の庭の面、是なる芝の上に扇を打ち敷き、鎧ぬぎ捨て座を組みて　（頼政）

前者は単に「約束固き」の句を出すために、「殺生石」を引きあいに出しただけのもの。後者は名所狂歌によくある形で、名所にちなむ謡曲の文句を取ったもの。

(7)　梓弓春の山鳥射て落す　こはそも何の尖り矢ぞさは　（銀742顕興）

「諷詞」の肩書があるが、特殊な手法である。「梓弓春の山辺」という句は「志賀」に、「こはそも何の」は「唐船」「善界」「藤戸」にある。しかし、これは謎遊びで、答は「山鳥の尾にてはいだりける尖矢」（「鵠」）である。その矢で山鳥が射落されたのは何の科ぞというわけである。この手法は他に例がない。

謡曲の詞章を典拠とする狂歌の手法は、ほぼこれで尽きる。同音異義の取成し、異なる事柄との取合せが中心で、これらは古くからの手法であり、また俳諧の手法とも重なる。滑稽味は排除される傾向にあり、(1)の取成しは奇抜さを失い、(2)の掛詞や(3)のかすり、もじりへ。(4)(5)の取合せも対比の面白さがなくなり単なる文句取りになり、(6)になる。すべて、取込んだ語句のみを利用するもので、元になる謡曲の一曲全体の世界、その語句の背景にある情趣などは全く取入れていない。

次に謡曲以外の歌謡を利用した狂歌を検討してみたい。

三

(1)　ふらいふらいふる妻いとし我かたへ　踊りによせてきそん十七　（古445行安）

『古今夷曲集』で、俗謡を利用した唯一の当代作者の狂歌である。上句は『糸竹初心集』などに記される近江踊[10]

○ふうらいふらいふる妻いとしな　我振る妻は猶いとしやれ猶いとをしい

の文句を取っている。同じ文句は『毛吹草』の発句や『古今夷曲集』序にも利用されている。下句は『伊達家治家記録踊歌』木曽踊

○キソン十七寅ノ年マイル薬師ハマイル薬師ハトラヤクシ此キソイナ

などの文句を取る。両歌ともかなり早くから盆踊などに利用された踊歌である。

踊もてきそん十七八人も　まじる役者は笛太鼓かね　（後363保友）

うはかはの目元に塩はこぼるれど　ただ心中の水臭きかな　（銀685満永）

○あの君様は伊勢の浜育ち　目元にしほがこぼれかかる
（寛永十二年跳記）

有名な伊勢踊の文句で、非常に長期間流行しており狂歌にはよく利用されている。

行風は俗謡を利用した狂歌を作っていないので、この三首が有力作者の作風とみてよいだろう。特色は、当時も歌われていたにしてもやや古い盆踊歌を利用していること、歌謡中の特徴的な句をそのままの形で取込むことである。同じような例をあげてみる。

君が代は穂に穂がなりて年々に　めでたからふよ久しからふよ
（後604宣秀）

米桜継分（つぎわけ）にしてはびこれば　穂に穂が咲と是もいはまし
（銀117重香）

○今年世が良て穂に穂が咲て　道の小草に銭が生（な）る
（延享五年小歌しやうが集）

「穂に穂が咲て」の句は、現代の盆踊歌にも継承され類歌が多い。書留られたのは比較的遅いようだが、早くから歌われていたのであろう。宣秀は肥後、重香は摂津の三田と地方の作者である。

歌にばかり歌ふてゐつつ吉野山　花のふぶきを終に見ぬよの
（銀115恵空）

○吉野の山を雪かと見れば　雪ではあらでこれの花の吹雪よのこれの
（吉原はやり小歌総まくり）

肩書は「世話」で、「歌にばかり歌ふ」が、思っているだけで実現しないという意味の諺。歌を小歌とみなして、三味線の流行歌「吉野山」の一句を入れる。作者恵空は肥後の人で、都へ出たいと思いながら実現できないという内容と趣向がうまく一致している。

(2)　面白やあの山見さい此山も　いただきつれてたつ霞かな
（後66心笑）

○あの山見さい此山見さい　いただきつれた大原木を
狂言「素襖落」などに使われる小歌であるが、本来は歌舞伎踊に使われた流行歌のようである。これを利用した狂歌は多くある。

あれ見さい是又見さい踊子が　いただきつれた頭巾手のごひ
（銀263太女）

やあ見さいあの又山路この山路　戴きつれた柴の座の町
（豊蔵坊信海狂歌集）

わけて今朝あの山見さい此山も　戴きつれた富士の白雪
（信海狂歌拾遺）

これらは等類と言うより、「いただきつれた」物をいろいろ変えてみせる一種の型ではないだろうか。同様の例をあげると、

西へちろり東へちろり暁の　明星やただ我身なるらん
（後1337沢庵和尚）

暁の明星ならで西へちろり　東へちろり飛ぶ蛍かな

（銀203行重）

これは狂言小舞「暁の明星」に依るが、あちこちするものの譬えとしていろいろに使える。

聟ならで取すましたる早苗には　三石一斗米ぞ出来なん

（後274毎雄）

聟ならで今年は年を取すまいた　三国一じやたまりやいたさぬ

（卜養狂歌拾遺）

前者に「小歌詞」の肩書があるが、元歌の正確な形は不明。一種の言いまわしのように、狂歌や俳句に多く使われる。毎雄は「三国一」を「三石一斗」ともじるが、卜養は「たまりやいたさぬ」と俗語を取合せ、内容も前者は祝歌、後者は大晦をやっと切抜けた貧乏人の喜びという俗情を写し、作風の違いが見られる。

(3)　踏みつくる帷子雪の足かたを　もとの白地になすよしもがな

（後550宣秀）

中々に君を知らじがましじや物　もんじやいもなく思ひそめぬる

（銀651伯水）

御所望にあひに扇を書汚す　もとの白地がやあましじやもの

（卜養狂歌集）

いつの世にそめ色の山となりやせん　もとの白地がまし富士の雪

（豊蔵坊信海狂歌集）

かくばかり染めて悔しき筆の道　もとの白紙ずんどましでんす

（大団）

最初の狂歌に「小歌詞」の肩書があり、『淋敷座之慰』などに残る流行歌

○染めて悔しきにせ紫や　本（もと）の白地がましじゃもの…

を元歌とする。宣秀の狂歌は「もとの白地」という流行歌の一節を裁ち入れるのが趣向である。伯水の狂歌は、染色用語と恋の文句の掛詞（「白地・知らじ」「紋地合（もんじあい）・差異（しゃい）もない」「染め・思初め」）で成立っている。元歌も本来恋の暗喩であり、雰囲気としては最も近い。住友伯水は『銀葉夷歌集』で突然九十五首も入集するが、専門の俳人ではなく行風のパトロン的人物のように思われる。技巧過多の作風も行風の指導があるか。卜養と『大団』の狂歌は、ともに画讃を望まれて卑下してみせた即興歌。元歌の発想に全面的に依っており、(2)のように類型的狂歌が作りやすい。信海の狂歌は、蘇迷盧と染色の掛詞が趣向と思われる。

(4)　花の袖ちらと見そめし身のためは　思ひの種を幕の内哉

（銀538酒粕）

小歌ならば料理にはよき芝牡蠣の　胡椒ふり袖ちらと見そめた

（卜養狂歌拾遺）

柴垣を宇津の山辺に不二山の　雪の振袖ちらと見そめた

（豊蔵坊信海狂歌集）

夜目遠目笠の内にも霰にて　二度びつくりの雪の振袖　（大団）

二八にも積らぬ雪の振袖を　払ひもあへぬ老の恋風　（大団）

柴垣節に依るが、詞章にはいくつか種類がある。初めの酒粕のは

○ちらり〳〵と花珍しき　雪の振袖ちらと見そめしより　今は思ひの種となる　（吉原はやり小歌総まくり）

の形と内容に近い。種を播くと、花見幕とをかける。柴垣節の標準的な詞章は

○柴垣〳〵柴垣越しに　雪の振袖ちらと見た

である。卜養の狂歌は「芝の牡蠣を料理し胡椒をふりて出」されたので即興的に詠んだもので、物名的な詠み方である。信海は、柴垣を打つと地名宇津とを掛ける。『大団』は「雪の振袖」一句だけを取り、前者は本物の雪を後者は若衆を表現するものである。

(2)(3)(4)と、卜養・信海・黒田月洞軒（『大団』）の個人狂歌集とを比較してみた。卜養・信海は『古今夷曲集』などにも入集するが、月洞軒は信海の弟子で時代はやや下がり、『大団』の狂歌は元禄期に詠まれている。三人の狂歌に共通するのは、即興詠であること、歌謡の利用が多いこと、掛詞などの技巧よりも俗語の使用や卑俗な内容の詠み込みが目立ち、滑稽味が強いことである。また、これまで検討した狂歌の典拠となった歌謡は、相当早くからしかも長期間全国的に流行したものばかりで、いわば古典的流行歌である。「古き小歌」（『時勢粧』）と限定をつける俳諧にも利用されている歌謡である。そのため、三集で肩書のある狂歌の元歌は、一二を除いて(11)判明した。ところが、卜養の場合は不明のものが多い。これは詞書から伺えるように、当時の江戸の最新流行歌を取り上げているためと思われる。また、『大団』には歌舞伎の歌謡が多い。地域差も考えられるが、『古今夷曲集』等三集の利用する歌謡には、俳諧と同じような規準が存在したのではないだろうか。

次にこれまでとはやや異る手法の狂歌をあげてみる。

(5)　物食はで地主の桜を見る人の　目星の花は散るか散らぬか　（古474貞徳）

○地主の桜は散るか散らぬか見たか水汲み　散るやら散らぬやら嵐こそ知れ　（閑吟集）

狂言「お茶の水」や女歌舞伎踊歌などにも残る小歌のもじりである。

ちりちりや散り散りにもや飛んで行く　はんま衛の友を呼ぶ声　（古256宗増）

○浜千鳥の友呼ぶ声は　ちりちりやちりちいりちりやちりちりと友呼ぶ所に…

狂言小舞「宇治の瀑」の冒頭部分に依る。狂歌は、鳴き声と散り散

りになるとをかけるが、元歌の風景から全く離れていない。小舞の一部を切取って和歌の詞型に直したという体である。同じ小舞の後半部を使った

めで鯛をかけてぞ思ふ戎棚　つつた所が面白いとは（後21元信）

は、元歌の釣を棚を吊るに取成し、正月の風景に転じており、手法的に全く異る。後者の方が当代的であろう。

(6)　上手なる播磨の書写の紺かきも　妻とふ鹿の声はえ染めじ

（後404資之）

○さて上がひの小褄には秋鹿秋鹿が　妻恋ひかねて鳴く所を付け

てたもれや　播磨の書写の紺掻や　（『踊唱歌』鎌倉踊）

などと伝承される歌謡と同系のものに依っていると思われる。伯母からもらった布を、播磨の書写の紺掻に染めてもらうという筋で、雅やかな模様尽しの長編歌謡のクライマックス部分である。そこを取上げて、声を染めるのは無理と茶化すもので、元歌全体と関る狂歌である。

明る迄脇目もふらじ照月の　桂男に招かるるとも　（後420方寸）

○面白いとて月な見そ　桂男に桂男に招かるな　此きそいな

（伊達家治家記録踊歌）

○鼻毛のばして　月な見そ　桂男の招きやるに　（似我蜂物語）

など伝えられる歌謡に依る。「月な見そ」という元歌に対して、「脇目もふら」ずに一晩中見つめようと反抗するもので、単なる語句のもじりや借用ではない。

(7)　検見も許せ神田の台の百姓の　与吉が女房植えし早苗は

（後455貞富）

「獅子踊詞」の肩書があるが、元歌は艶笑歌である。雑俳や黄表紙など後期の江戸の著作に見うけられる。狂歌の表面に出さない元歌の歌詞を連想させて笑いを取るものである。貞富の狂歌は、卑俗な点では雄長老などの古狂歌の余波のようにも感じられる。しかし、この狂歌の手法は『佐夜中山集』の次の発句と類似している。

思へ思へ月夜烏に郭公　（矢野盛広）

七夕も芭蕉葉に寝ん雨夜哉　（吉村山里）

前者は「月夜烏はいつも鳴く」[12]、後者は「芭蕉葉に独り寝」[13]という歌謡の文句に依り、それぞれ「いつも鳴く」「独り寝」を裏に込めている。一種のぬけ風と考えられる。ぬけ風は談林俳諧の特徴とされる新しい傾向である。貞富の手法がこれと同じならば、やはり新風とみなさねばならない。しかし、この手法は後に継承された様子はない。

以上(5)～(7)は、元歌との結びつきの強い手法のものをあげてみた。

四

以上、謡曲と俗謡の詞章を利用した狂歌の手法を検討してみた。いずれの場合も、元歌の心や情趣をふまえるのではなく、表面的な字句にすがる手法がほとんどである。それは貞門俳諧の本歌取や謡曲調の手法と同じと言える。撰者行風はじめ、作者の多くが貞門俳人で、貞門狂歌集とも評される三集であるが、それは歌謡の利用のしかたからも伺えるのではないだろうか。

註

(1) 狂歌の引用は、すべて『狂歌大観』に依る。但、漢字仮名遣いは適宜改めた。

(2) 時に「本歌アリ」とするものがあるが、全く同意なので「本歌」に統一する。

(3) 今栄蔵『談林俳諧史』・田中善信『初期俳諧の考察』

(4) 『伊勢物語』『徒然草』が多く、和歌の源氏物語や狭衣ではない。

(5) 例をあげると、

金払ふ跡より恋の責め来れば　傾城やこれ煩悩の犬
(後923行風)　松風―古今俳諧歌

唐船に向ひて釣を住吉の　明神秘なる和歌かな　(銀458成輪)
白楽天・筋のみ

などである。

(6) 小舞を俗謡に入れたのは、狂言ばかりではなく、歌舞伎や酒宴での踊りにも利用されていたからである。

(7) 狂歌の出典について、『古今夷曲集』は古、『後撰夷曲集』は後、『銀葉夷歌集』は銀と略し、次に狂歌番号と作者名を記す。

(8) 謡曲の詞章は、便宜上日本名著全集『謡曲三百五十番集』に依る。謡の内容とはあまり関らないので、引用は短くした。

(9) 「嬶妍たる両鬢」という句は御伽草子などによく見られるが、過去形になっているので卒都婆小町に依ると思われる。また、山崎千軒といった言いまわしがあれば、(2)の掛詞の手法に入れる。

(10) 歌謡の場合、類歌が多く、同じ歌が数種の歌謡集に少異を持ちながら記載されていることが多い。全てをあげると煩雑なので、なるべく刊行時期の早いものや、狂歌に近い形のものだけをあげることにする。

(11) 不明のものは

異な竹やをさへた竹や寝て折れて　花にましたる雪持ちながら
(後561因幡守長治)

浦々の関の清水の歌のせて　今や引くらん三味線の駒
(後1182高故)

共に「小歌詞」の肩書がある。後者は拾遺集の貫之の和歌に依ると思われる。

(12) 烏が鳴けばも住のとおしやる　月夜の烏いつも鳴く
(業平踊十六番)

など。

(13) 昔は松の葉に二人も寝たがさァ　今は芭蕉葉に只一人　てつ

しよて　のふ只一人一人芭蕉葉に一人寝る　てつしよで〳〵

（赤本『ゑんまきぶつなりやきがうかぬ』）

など。